

神の配慮にゆだねて

受難節の日々を歩みながら、イエスさまが十字架のうえで残された7つの言葉、いわば遺言ともとれる言葉に聴いています。「人の将に死なんとするやその言や善し」ということわざがあります。人が死に臨んだ際に出てくる言葉は真実であるという。隠しようがない、取り繕いようがない、その人間が地上で残す最後の思いが嘘偽りなく表れ出てくる。そのような意味でしょう。日本には辞世の句といわれるものもあって、たとえば「旅に病んで 夢は荒れ野を 駆けめぐる」でありますとか、「たらいからたらいへ移るちんぷんかんぷん」とか、「散りぬべき 時知りてこそ 世の中の 花も花なれ 人も人なれ」など、心に残る多くの言葉があります。気になるでしょうから申し上げておきますと、最初が芭蕉、次が小林一茶、最後が細川ガラシア夫人、明智光秀の娘、クリスチャンだったと伝えられます。ただこうした辞世の句はある程度、余裕のあるときに考えて備えておける気もします。嗜みとしてですね。最後の言葉はこれにしておこう、こういう言葉で自分の最後を飾りたいという自己顕示欲のような匂いがそこはかたなくつきまとう。そこへゆくと聖書は人間を美化しません。わたしたち人間の等身大の過ちや罪を率直に記しています。それは人間の救いはわたしたちが何か素晴らしいことを成し遂げたりすることによって与えられるものではなく、ただただ神の憐れみによるものだとして理解しているからです。罪ある人間がいかにして救われるか、それは決して人間の行いによるものではないことを知っているからこそ、人間を褒め称え、称賛し、それによって点数稼ぎをしようという発想がありません。聖書が告げるのは「人はみな草のよう、朝には咲き、夕べには枯れてしまう。しかし、わたしたちの神

の言葉はとこしえに立つ」という教えだからです。さて、こうしたことを頭の片隅において福音書のしるす主イエス・キリストの最後の言葉を見てみましょう。これまで「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」「はっきり言っておく。あなたは今日、わたしと一緒に樂園にいる」そして今日とりあげるのが、十字架の上から、そのそばにいた母と愛する弟子に向かって「婦人よ、御覧なさい。あなたの子です」といい、また弟子に向かって「見なさい。あなたの子です」と語られました。これらの言葉は十字架にかけられた直後、まだ若干にせよ余裕があった段階と思われる。先週取り上げました「わが神、我が神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」とか、これに続く「渴く」というお言葉は死が間近に迫った人間の霊的な不安や恐れ、肉体が極限まで死に近づいていく際にあげる悲鳴といった死と向かい合った言葉となっています。そして最終的に死がイエスを打つ。その時、ルカは「主よ、わたしの霊をあなたの御手に委ねます」という言葉を記し、ヨハネは「成し遂げられた」という言葉を主イエスの最後の言葉としています。こうしてみますと、十字架にあげられてなお、主イエスの関心事はまず自分を十字架にかけ、あざける人々への執り成し、おなじ十字架の上からわたしを忘れないで欲しいと願った罪人へのいたわりと救いの宣言、そして十字架の足元で見守る母に対するケアであったことが分かります。自分のことはいつも後回しです。生きてきたように人は死んでゆくという言葉もありますように、主イエスの最後はその生涯につねに示されていたように憐れみに満ちたものでした。そして、最後は自身を神の御手にゆだねてゆきます。この最後のところで、ヨハネによる福音書の伝えるお言葉はマタイ・マルコ・ルカとはひと味違ったものとなっています。「成し遂げられた」という

言葉は勝利の宣言です。マタイ・マルコ・ルカはイエスがメシアであり、神の子であることを最後まで人々の目から隠しています。それを十字架の死と結びつけて、ローマ人の百人隊長に「まことにこの人は神の子であった」と発言させています。福音書とは、イエスは何者であるかということのを証するための招きの書でありますから、最後にそれが出てくる。ところがヨハネによる福音書は最初からすでにイエスが神の子であることを宣言しています。2章に記されるカナの婚礼の記事などを見ても、その栄光を表されたという書き方をしている。すでに神の独り子である神イエスという立場を最初から最後までつらぬくのがヨハネ福音書なのです。そのヨハネが、主イエスの十字架の上のお言葉として真っ先に母のことを取り上げたのはどういうことだったのでしょうか。先ほどカナの婚礼にふれましたが、あ那时候、ぶどう酒が無くなりました、と母マリアが告げた時、イエスは、婦人よ、あなたはわたしとどんな関わりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません、と答えています。そのように血縁の情というレベルではなくて、神の時、神の御心という観点からご自身の働きを律しておられた主イエスが、最後の時に至って、つまりご自身の時が来た時に、残されてゆく母親のことにふれている。まず敵対する者、憐れみを請うた者、そして無言でたたずむ母親に声をかけられた。後年、嘆きの聖母であるとかカトリック的な脚色を施されたマリア像はともかくとして、肉親の情として、息子の死、それも十字架の死を受け止めねばならない母について、主イエスが心を動かされないことはなかったでしょう。最後の心配りとも言える声かけです。興味深いのは当時は、今日のように社会福祉制度がそなわっているわけではありませんので、やもめや、孤児などは原則、血縁の共同体である家族・親族集団がケアします。あるいはそこ

に土地のつながりが前面にでて地域共同体がケアする場合もある。国などの出番がまだない社会なのです。そうすると、ここで主イエスが残される母を愛する弟子に託したことは特別な意味をもってきます。それは信仰を同じくする共同体による新しい交わり・生き方のモデルが差し出されていると読まねばならない。これはやがてペンテコステの出来事のあと、人々が共同生活を始めた時によりはつきりと姿をあらわすことになるのですが、すでにここに教会の雛形、信仰によって兄弟姉妹となつて互いに助け合って生きる共同体の姿が、キリストの呼びかけによって生み出されたと観てよいのではないかと思います。この箇所は教会の歴史ではなかなか解釈の分かれる箇所でもあります。カトリック教会の場合ですと、さきほども少しふれたように、聖母マリア信仰がありますので、ここで主イエスが、母と愛する弟子にお語りになったことに意味を読み込んで、教会の母、新しいイブとしてマリアを持ち上げる。イエス様がここでマリアに特別な意味を与えた。しかも弟子たちに対してということですから、イエス様がペテロに天国の鍵を託したとされるような読み込み方がされているのです。一方、わたしたちプロテスタント教会には聖母マリア信仰はありませんので、むしろここでは愛する弟子、つまり残された教会に託された働きを読み取ってきました。それは主の言葉に忠実に仕えることによって生み出されてゆく新しい関係を生きることです。それは神様との関係において自分の歩みを整えてゆくことであり、同時に、主イエスがわたしを愛してくださったように、同じように主が愛され、呼び集められた者たちとともに血縁や地縁や利害関係を超えた神の子としての歩みを形作ってゆくことです。これはキリスト者に託されているこの世に対しての大変な挑戦と言わなければなりません。十字架の主から、「見なさい、あな

たの母です」と言葉をかけられた愛する弟子は、そのときからイエスの母を自分の家に引き取ったとあるからです。こうして主イエスの母も教会の群れに加えられたことが分かります。

今日は最後に詩をひとつ紹介して終わりたいと思います。わたしの好きな詩人のひとりで、永瀬清子さんという近代日本の女性詩人の草分けのような方です。石垣りんさんや茨木のり子さんの先輩にあたる方ですね。この詩を紹介するのは、ヨハネだけが十字架のかたわらにイエスの母を含む4人の女性を置いたからです。ほかのみつつの福音書では遠く離れていたと記されています。ヨハネがこのように書いた理由は、主イエスの死から、神の子とされた者たちによって始まる新しい群れ、教会の誕生を意味づけるためでした。でも詩人は、そこに女性ならではの働きを見て取っています。いまはこういうことを言うことやこしい議論も始まりかねないことは承知していますが、それはそれとして、愛する者の死によりそうわたしたちすべての者への慰めとして心に留めておきたいと願っている詩です。

「悲しめる友よ」と題された詩です。

悲しめる友よ

女性は男性よりさきに死んではいけない。

男性より一日でもあとに残って、挫折する彼を見送り、またそれを被わなければならない。

男性がひとりあとへ残ったならば誰が十字架からおろし埋葬するであろうか。

聖書にあるとおり女性はその時必要であり、それが女性の大きな仕事だから、あとへ残って悲しむ女性は、女性の本当の仕事をしているのだ。

だから女性は男より弱い者であるとか、理性的でないとか、世間を知らないとか、さまざまに考えられているが、女性自身はそれにつりこまれる事はない。

これらの事はどこの田舎の老婆も知っていることであり、女子大学で教えないだけなのだ。

—こういう短い詩です。わたしたちは、それぞれの役割の中で懸命にその場を生き抜き、最後は神の配慮に託すことが許されています。そして、いつもわたしたちの働きは十字架の上から、主が語られたお言葉によって整えられ、そこから新しい交わりを生み出す働きへと送り出されていくことを覚えてたく願います。

お祈りいたします。